天正記 二

天正記巻第二目録

一 信長公逆臣に滅却并殺の事
一 勝利治めんとせられ事
一 同和治めんとせしの事
一 並て滅利治めんとせし乃事
一 佐久間玄蕃とて滅すくしる趣
付 中川瀬兵衛尉討死乃事
一 秀吉公を向柴田軍をいれす再旦のい
一 秀吉被別治をつかうれ事
一 柴田権六佐久間玄蕃いけどり洛中渡す
一 三七殿自がいれす
一 諸國城わり定乃事

[seals]

羽柴筑前守殿秀吉ハ天正十年十月十五日
に右府君乃御そうれいをおこなひ給ひしまたあの
かくてひとつのひはしさる乃すゑ山さきれ上ふ
一つれしやう城あしらへまた丹波城あつかひしまう
みんをおしつめたうふしてゆきされ秋田城乃父子
の鍛居信忠乃法わかれのきさきをむつ色とうまあはちら小
栗しまらち方こせしめんと北川すら処ありお
その三七信孝柴田ハ瀧川とゆうたんしていかく
秀吉ま若君をおれころまをりてを技一人天下を
掴もりいほしいまくそうきんいをかるうへをか
るうんせんなりむうしたん乃てうかうり乃わく
とまり國中乃まさそひをま孫くれわうさん

や否一味同心してこれをうかゞひ坊す家ありしをりてし
ひてよし一たん将軍の御子若君とたのみし
うつりハ又せいし乃御うまを思ひてうらやうれ
惑れせりへ其信長んきよやうきすあまりさん謀
とひのちうさくとくんさくはふあのとれたちた
志田里乃のこ勝家同じ伊族のうこうつとよこれ
らはらりくんいけひへあつりひせしてまんへた
又左衛門とし家やわすす春三金森五郎八名きやう
とふ乃ありをゆへを越おへ出りし先へとうし
山崎乃ゆるふのふしてろてとそこひくうし只今
うん皇ハをおこそうをひてき人馬乃流され道
性のッさる里職ろし國れむなしきまりとおもつり

らふ秀吉公のむほんをしりあんかうひとやかららう月
のけしめなりとしまうりいそぎ坂城までけるに秀吉
ひそしをかのひうよりへまるようのいなれも東国を
志つま謀のいさけるあいたすいしつ出たる勢のあ
へうらもとくわやふる越さきのう国なりいつの守
つゞとよ越前の志んをとれむとい色をけうい
れ寄手いほろしてうくふ志つんといらくうしまと
お國のよくあさふ酒井おかりとかむりしもとう
くそんのそのふ人あれおうひもさん女あるうりうつ
やよちのまん張すそら戦きをまうろうるえんてしうれ
たつまよう旗なしかうき気いくす城れうあ川やよ
其ろん先ハをほんそうすゝゆゑ勝い人やうしん

すゑとをらば今秀吉と一天のあるじとなるべき
ことうしなふさりけり佐久間玄蕃乃允のれゐ
國ふとつくけんにとらむとれいくこれおよれ
てうつ也よ内こうしをを加くむひくよしを由て
おりひ則滋賀ろりくるむらふあひさおもさのふ
めんくさこれさう又郎左衛門請く井志田ん
あへ長景越中富山の紀伊守まちやまうこの
かゞうれか能國はくんひやう都合三万よきりん
うれし大風ざしのぶしん富山王けさうはいて
里とし上世國中乃けうと或を汁いそつとくも
越前ひをさんふまうを旧と包をして一國
一ゑやうとなしのふくら先をあそれ見ひとへは

なけひさしやよの儀は志やふて信孝卿わつきて信
孝乃老母ろくせをそへ人志ちとしてこれ頼出す
秀吉ゐ違とみくいのしへを思ひな我まゝさんれ
んゆしをなしたそまつり翁十二月廿九日より山
さきの城よりてしそ世おうのせうりとりそしなれまそ
元日より志ゝ里まての礼義しおれも三ヶ二三日乃
あひさよおあくの太刀ふうやうてんちうふつる
すりしやる門前市をなす乳礼はむつひてさえん
かひをつくし父子をあてにりひしせい
なう限とき天下のくふうちう秋やいまあらかあう
を志ゝふして前君ようちれあひさはこく丈識田
三すけ信雄ほ六代とあまちまうし羽柴紹因

正月よりしゆん秀吉又安芸より国〻の諸
侍さい義昭調あつそろへそんかうをあたりも将軍
済さい世の時代にもし彼ところ思召はれまいしは
人〻のんすう処なりあつらも十余日とうつまうに
其後又止されへうち扱をしまなく乃ちん御追至
なしくんじやうなの又海よまなせならうくらひて
けんうの人をち頂ゑもらうつまよそひやう
故たいうかなしすわさ上しらんいすたんきさ之
正うりかる此地色を自分出きまゑあさもひよるを
さのその大今夜い山陽之やうなんと済りい色ち
さんのこう色めして思天神出まいそこるとあし
らへ之の兵れ奴勝家小たびし無二いろ頂きもしめ

これをたつ御色んてい事たうス麻在来い射お
をみし越前の柳さへとしてう達しまを勝州まで入海
川左近乃大吏とうらそきへかつうとなしかう
て軍兵をさすら小正げ羽紫義滋当済く井をん
けい伊参らりん乃如いなしいよれるそうらいへ
さきやうれ之んをられたうらしすり三より総七
参議平沢は別中那乃しゆきまらそうしもして
秀吉自分も七八ヶ国の人をゆを引かんらくち
五こまりの分らもしいう達をきい取すへ拝昭
をりら故とる此すわさ之れんまへたさ以御ちん
城攻ちあうこくのようい城のさへらう秘敵
うれさふせい世州之よなくう氏城く兵あて小

とゝのへられ共し海ゟいくさを押よせさん／＼に破る
所すくなう次し一揆原をすへしく臣にうく
此時とひ分ちうをもしやらうのふせれかすし歎の
此のあまりさしよりこしさら天下のしやうりめ
山は大ぜいにて之を大丈夫わかしらへさら陣や
のたゝかひ義夫丈にもれところのみねしやうを
とりまきし信治郎めひきつ羽柴筑前守秀吉自身あるさ
よせてきのもたらしひとみるりたん兵粮もなくて
みられをいさゝのも本をひまはるひ山下をうちや
ぶり則ちえ陣ありの逸見を行くとゆひさけれとを
うき㊤にいもくをかつてこれを乍せくてきされは
小栗をとくめ時こまかくにまぶしきをかし哉れ

てんかうひやかけよひきつをとりて蚤くらしとや
まをやかりあるひハもとくらんけをふ源五乃こうし
をとめてくりうちうちうちくつきえいのしほ乃
もろもやくころうつ門をおひやうすれおうりよを
おう百人へこれを取れ誅り大まのりをふたと
あくちもしろう搦れさうけひたんれ事をこ
みるもけれのうをりしてい乃ぬをもくかゝし
志ゆへよ行しもん胁甲をぬきたいをやうのかう
さんいさを延るあひさつれち珠をたすけ鬼なりの
も海よおくり深きまられすれいちかめ山より信雄
むり色へさくまつる兄ねのしやうせいの地ゆう
こうの城あの三の所よ人数をうけさやうしふ

一 とうとまきすあれしもとけとなかやうてさめしとこか
秀吉卿柴田か里のすけは別おりてへとらいそ
のよしきまとききのけらすきよ陣を数ろそなへ
とういろくさうの所処に柴田人ちやうとまたんこり
ふく又萬手れやれのせありもつり陣とゝるよく
日向うたん小天神山れさるとのけよせきん廻ん
れ村とおくしくしくをはうたしきさやう
かきまひのとうちくひてましされ取ひく向うそ
くはかかきのかうしされてのうな色はさうこむ
たんく

一番　羽柴左衛門尉　堀尾もすけ
二ゝ　柴田伊賀守　木下さやう掃
三番　木村隼人佐　加藤作久右
四ゝ　小野の清門尉　一柳市介
五番　浅野弥兵衛　明石与四郎
　　　生駒甚すけ　小寺官兵衛
　　　木下かけゆ左衛門尉　大塩金右衛門
　　　山内猪右衛門尉　足田甚吉
六番　羽柴孫七郎　中村孫平次
七ゝ　羽柴美濃守
八ゝ　つゝ井しゆんけい　伊藤弥三ゑん
九ゝ　赤松次郎　はちすか小六
十ゝ　同孫三郎　神子田半左衛門尉
十一番　長岡越中　高山右近

十二番　羽柴[illegible]　千石権ひやうゑ

十三ゝ　中川瀬兵衛尉

しかるに秀吉馬廻りえまて川をうれ前に上八町しら太てをらきんのきゝえくするのそしそ小柱えもくく川きやうれゆうしや趣よりき軍の敵あひ十町すゑ町りしきさす人数とたてをなふて張まわといへん敵のそなへをうかしこゆくへすらにふしんとたしひくよしる六七なはりはうひやうえうちまれ連拝ちのくえうらよせ敵のたむろをうち林りんそよるれが君人馬のていしやうおとくを見そめ本のらんえよまうちうゑるまにけるところふう張なし只今てな[illegible]へきけ

て入趣さるりをなしまうく山地へ浮きうく張くかれもしきもみえさるあひさそよきん其のおもてまようりひ張かまへ高せい張をうか趣人前をうしをくつかりくあをなしまつ天神山のてきに張城也くうつてんまわふるれあひさ七八らやう引の寺同本山のふをとなし伴攻のきゝの人さ西とをなさ拆山河あしらへ羽柴さ色とんの方をいまかのうけれ尾さん中川瀬兵衛尉うれおはくまゑ六らやう引へたてる山太岡ちんとりの西上山を羽柴美濃くうゝ去秀さまちんなりし治のよけ人三やう乃うへまもゑ去秀人数へをえふうすひをなしをちすう生駒又田衆少るゆ石一

やなぎ本誌口志ん兵本なりけらんとゝて又のひ濃
くらハこれなりあ郎左衛門尉人志ゆ殿それへと
れこれをふ也くなりの初の越中守妻をたんあるし
きを海里國中此身とよをつい志やうまる越前
此人數をはきこゝくむつまかりははなす勝きも欲
乃さくるやう城見きもむつまのあひさあのれも
て包らる月取なさ此てうはく井しゆんけいを
初の志よしお此著す國きしむひてよしまる長
を海りいさ里志もくいりれ中まあつ安
んとよもはくにけるさいへ是も猿なんよいね佐
とうり城あら此はくしこあさりしをつくまる
伊賀乃つとひやうあるえさるまよ川て上洛し

わまよ將くゆうち内院城はくましいへともうれ志
はしなし海こゝに秀吉をゆるしてを我一代の内
ふかくいひ越前乃にを吟まるとらむ方の右京
城らく守乃ところりさいもなるすりくの
こうしひくよし志ちせんをたいらはかの乃そこ
をたつらんまをいそしそ草のかけまでてういふる
てきのゆいあんすり秀吉なるにをはさんへおしむ
やり人せ通川里無志やうれ為ゝひそ候はまや
せいきよしね金銀をおくやう志らく中らく
くいいれ猪きいれやう志ぞうけのすへうこ寸家
おといそ勝ゝよ人数を入ぞ日本山てうつやく
れやうきけるこれふよ川て本村隼人佐をいき

り至大宝寺八幡下まで山崎しやうりんじとうせ
かまへ日向守をうたんとまもり山しやう
ぐんむかんれんくろきんの勉さいしとすそ
白中にあてさ許をはし里入られのんくれく織田三
七信孝をひてよしとようちまさ三好信おくり
たいしけいしやうのうしろえかりおうけなさの
んかりうるかゆんにむかん根なし柴田勝川と一
とふして天下をくはゝんすん丈織定秀吉これを
山て四月十七日ちとしまよろし滝川大つまの城より
いくさ里信ふうを勝川滝川乃人しゆはしく一子
みなりもうくをやきさまけら柔秀吉せいさうする
せめいつまうれゆかつ城さんすん丈のとしろようれ

しろされにおりとかの水きをさ里ゆうしやうるれ
勝かりしさるあひさ大かきすり又六日たいたう
ちを内るりせいしうえ日の志やう信雄の他人数
うれおりもうひさのうえ長谷川みな又柔たの山さ
き滝田ホせめ候めおちさるの由左右めり四郎ん
うつ里れすいれうすり然よ柴田勝家しゆむおん
すりち々と紋天下とらう趣きるす わろろむなり
きうとうりつりへ徳一味のられ程合とさんし
秦うを今あのなさ三ま川と一せんしゆひさし
そひすゝ今ひてよしちよう州まおもむくれてう
そもさまおつけおりてうらやみるへし彼むほん
人山崎志やうりんを柴田しやとして款乃おう

孫これをきゝやう一しく〳〵見たつまさくつても
天正十一年四月廿日佐久間玄蕃允大将として
江北よりよけ志川のかけりまあてゝとらん中河
瀬兵衛尉きよ秀がうるかれ尾さうまとしおとすう
柴田かつ家木山さまやまのおきへとして人数と
ちのくやさくよすう清秀ハ殺してうりをよひ吟
遣んまをらうけらすうちら世古とのく志れ侍
なりいのよしれかれまさ弟さんのむとうれえり
とりく八左衛門といのふかくやおもりひさこめう
無あよあふてもりうく事なの達志まそ川一手に残
さたえしもとのうけれいをもなれつまいさす玄蕃
允のつまし物達と見あまをれをらはおと川ゝう

こめあくらふきよひて見達おそらしとつくもの
又六十歳ばかりのそふおなりんてさん〳〵まきり
あふ上王入といさく一たんせうまをとうれといへ
やまも敵たせいおれりそ家がひ志人をとり見色見風
乃さりすまうこくみちれ入酒井ま清秀討死に
至そ時たん〳〵のすけうかふおりさらを取とる
前そけいし北城ひの助援をらふこえん夫をひふ
かてし風あなひくせいあひりるをそん日ふうる
やかりつちうら取なかへられいくこうされ
みあるあれとあらんそそんや此時君引とるうり取
りそ存一たんまつ乃将でそるつ外処まいぬ外れい
まりこれをやかるいつし〳〵へくしまさこをもつても

まくきよらんすなはちひさく時ともにされての時とも
名りんかのそなへすり一らんやふれくさんともふ
きつたうしすとい色も志し由一つして思んむとを
わりのきまかくろうてやうしやうのくえんをそ
こふるゆへすりこつふしてはかれいまさわひえ
清るるすゑのふく丈るまうけいをもつくまたん
乃らうしんあり秀吉公てきよひてうさ御く乃宗
わきんむかんあるりよへとさりなりつ時めひさ
柴田一せんにのぞんと小川しきゆ承りひき
こそりのうをうくすれ宗らつうなく数日頭さく
れとしつ小敵うつうわり出るまたむかてあさ
さるいきんはきけてうくまうちをさせん天る

れれむの中にあり天下たししゆふかのせけや
とち由んのふむち頭そへくんう川乃名馬けう
てい清ふいとすくみうる井きすかはしさうわい
けうくしてりかち山のふりくとそさるわりろ
ちうちのつそうのいふをきりちするを老おわし
すそふ夕日西にかくふ則ろやうかほこ乃ほと
そこむつるその身り小谷れややまて秋そんう
とうひ出うかをさるのふくはりいれのふくは
本丸ちやくちんを三十六町を十三里弘二町らん
とまうけ清く頭事いかの丨色いと乃りくらさや
ふきまよりかひしつめくんらうなし人るのかん
清りきことさうしかちすうるむしくけにく

ひきやくはせつてふしんのうし秀吉今枝のゐきさ
かれく一きんはとよふへきれてう家一けんは八
本一三やうはくらしてこれとめしはなしさのか
ふりらするへしられまんしやうとはまれもし西
あひちらふへきよし出陣くられあひさ戒を
二里三つき又里六里これともこゝなりを海八秀吉
きろきやうの地なりこれふよちらん中のうち
りうは又色とくくろや人当んをいさくゆゑすわ
きれりじうでいく法卒しくゑ行られ候な
とし秀吉ちつきやくうくのこしましとうけん
つまえふとよもさるところなり勝家きのふの合戦
はせう利被浮られあか却ひとをつていよくゆる

なるはくねよろこびほうひやう山ミ孫兵ゐに
はく北越前加賀越中かゞ國の人数六万よ
れさたてならへあうまつを天下をしめ鳴苦一
日のせん比ありよし一世のてんうんちゝまあり
分令を与ふ後へしるを万てんうりくへしてこき
ちん又まんの中へ秀吉也しも掲くんうつある三
をしやうをそろへはきうくは後ろ見しく甚
一めうふ人するうれは色はく井長愚をさくひあく
なり毛利ておりのし一たんわたんせしむせいんへせ
んのあるべきすうかくすこれをよりてこや無せ
ちやう坊ないすとは色みをく又千石檜兵来四國
のをさへとして行りし色先をうち色す池田紀伊の

ちねんろうさうのほめて也すなりこゝに甫陣読
まそろいすきんしゆのたゞよ東又めひとく於く物
ゆかりしこの人ともゐとつけし除のめひさき
しさうし物馬めんる鎧こしく里引そうひ帯
乃まごにふわうされはめひさひくうしをきむふ
やいんへ光さん勇巴さる乃旭よりのへうたんのる
あるしわさむく旗これをなく敵陣まてうふきやう
ふすゐり里とりへ柴勝家ゐ為軍法よう年ろり
よろし鉛夕ゆりうをはくきうう天下よ助うふり也
あやうふな供めら以すこく小法あやすもつえん
ちうなりよ人の云助うは武家のあくまてうれ
らんきんゐよあらちやうしやうの下まてのなう

もあふわりこれをいてなんうれやまくもをいそう
浅ゐんやうれおくよるひけしさるゐ乃西くみり
及ひうつせん国とせめし法うをせらろなりうしろ
いらうをうおはうの遣いとやすめいあくせう如
とそけ己さる所りしてよし見合さん為の茂
侍二三百余柴田うもたりく色一りんしよさり
うくて里むうふ兵一千こまき旧うひはきあふ秀吉る
の左右よしていけとりふんえてとくさくやうし
ひ将己すれいくさふはうれいとをきそ路ゐく乃
死人をろんきす血とすくて里いそ又頭はく老おかし
むりしもんこうの合戦のときもしとをりちとす
まし里いふをはく中鉛まそはめし在今次第すり

あまりのくもつろ一番やりとかうするの物なり又
よけくつを経卒抑ひつゝ是をとゝろき老又手なり
のこる越人数の末の日たうけ東西のしまき本の
中へといへ入柴田や勝家もきんしの面よりさの
しやうれぬしやうへとせんへるやしろゝ秀吉ハ
同廿二日越前北荘中小のさうお田又右衛門尉
徳山又吾儀尉や母られを河内守とまゆる所の城
かうさんつかし一こうりころさるつてんとり色を
まつ勝家とうらをさすへきためりまとしや
めんを抑すし世廿三日に清くん当大河張渡り水
しやうのところ押寄する所しやうくハくをうつ
りへ年こおあしらへしやう衆としてつしとの

三千余人いまをとく処れやれのを物もまをとく
うちのこれ宗とひくのけりゝりとりていカ
を得てかの乃めひさしあくとうのをすせめぬそ
すへ衆をそうかまへ此とりやふりしやう石衆
十吾十又吾段を出てとらまきき被らめとなす城北
内これをみく大勝の人く町しこうりけあれを入
せく終う城乃うちきるあんくう段作くして秀
吉もちさんこらうれもく中ふひやうへしてうつ
家のれら段たすけわひとのにせたれ越き秀田いさ
めうりといふ色を地のおもてをまくしや段をなし
越前のらをやしなふりとしのよかんきう
もんまん乃奥をなしうつのへちうりの入日を

むらん今夜のあけかたりをまひこ由志んゆう
けうとなしあありはかしむつしろつりへ さうのつ
天下とる一うく次第くましやくとなりしけん
これわい達ちう色中のこおりひゆしちんおん
ちんくへい山のしくおふとえうし御ハ上らう
越後大名清水孫く乃せ家ちう老母尼こうまいさ
紀まそうとを中まで下とこくうしよす内の天女ふ
しやくをらせ一きよくれうくひみたんれまひ
くりの色しくすそ小志ひひやう志はうもた
のしたの志とするとしいへ花内まも志由いれん
やますきやう為いく氷けうこ所して出るるそ
まやりのこ花やう守井れきまよく口めんそうのころ

これとさふきせん万里れうら見玉のふるうの徴
いろききうこれまあくなさんやさんおうりとまよ
ふ花あひさ酒と盃めたいさんす勝家やう姫志ん
それまいりて秋そのいくめ事としろおひなれ
志思ふところなくさくひそくのまくらをならへ
万春のらきりとのろふひすいのふさうけをうそ国
千秋のよろこひ酒くそんし風のまへ乃ともし
火四のけ乃富すり明日れを御くさまらして
天をそらへさすわ小谷れ浅井さも勝家さい志まよ
まりらしいへ花
柴軍伊一家いまそゆうる里をすしこと
さうひくよしハ 北公勢うんまいさるまで民

うわひこさしつ〳〵さるゝそのなしわをもてうさ給
ゐ楽内しおちゐもんりなんのさまうさけかあ
らんやうれ俄ふおもしくもうりくうしうふ以
くりをはくつまうしうちくこまおたるふのゆへく
おもあゐこなうかをらる一ゑ田のみけ一あのなり
きもれしやうのうんうりよるいきんや我たれん
のちさりをやめりとくもうせん世を鋏墨いさた
たもしさうんや女人たりといふとももんをとつとふ
をとうゐうかきすを請やもありあのひし切すし
れんないふあひむりきんるすねうふ起るりとそ
うれはむつしくさ里となりしのんきんとしてゐと
ろむはしふ中そらうりかとくおすれをとはる

海をと云へく

いうふたうしうちぬれけくも夏の秋れ
ゆあちをさうふかとくれすうれ
うゐし　うつ

友乃秋の夏らけりなきさめとのなれ
くも卅うしあけよ山のとくきこそ

めはらこのしきんの粗迅ひやはつし秀吉やらの
一夫より読章を捐そろへ城中へせめへ二の庵
秋ホーれ合戦まをひくさいをおつしるとのつさ
あとうれをしち流れ町一さくうとたくよそし
ひてあーかうしむ而きひゆ今今あの時而勇せさ
らんや天下のゆこ先今旧おさえむへ本とらんや

将監はいさゝか義将井にけんまかせよ義川殿
まれ乃海さまて至大石をもつてはさおきをうくる頭
かさなりくる故しりんの武士はしはく義不大
ちんしの九ちやうのりつけはしらくろゝの戸
ひらうくにあまへせいのやう三百余人たそ
こそりこれをふせくたゝかふ乃うちにかり一らう
十かうり一うくらうのなく光りはらなきてん
しせ高くうひへんせいともつてこれ頭よしめ介
らんとひ達しるて川うぜいてら遠頭うち去る
皇をもつて遠を経わ頭のく遠皇をうくる
きつ頭ゆうかるをのあかしうるの申へに秀吉
けちしてはうひやうこれ頭のうちに六ぞさしかく

めくらう待数百人ならひむまやうまうち捕はうりに
て天しかの乃うらへせめ入うつりへ年ころの乃ふ
ようく今家におはしくすせころなりい國にといそしを
こゝ川兵を王けおねにをといそしおしつ国高おち
乃合戦を猶乃うをなりくそうちのつしきのいのを
まれれてう敵中をもしめる猶い前後をたて門め
けんぬつ志成頭さうい万天下もあひはたふつてゝ
よしかうしやうか名家中村又か許すく根お
小谷の津町く一志の乃諸方ありなふりし又廻ん
方町くへこしらく頭い頭をさへ筆すく里うう
出しこれをうちうとく　一志國を
思ふとしうら清蓮はくもゆくみちの

三らくへやしてれ出ほとくききを
家勝さけなむまとらきとどりんし鎧れ褄をとうれ
かすもかつてうのみかこてのくさをとぬられの
こうれくさ小谷乃方呼てうなからきりふよ川
ておいらのまうくろすいさいしまうかれ
けりしまうの是又せんきれそうりんみかしすや
討死自分のとのもけ於我家れなしひや三やう
とやひれめつ忽しやまやうをされうをとまぬり
まんやふたふれいかくとはしめて十二人思ひ
人三十余人の女まうさらたく今のさひあとひ泣
て念し由せう三やうのしゑのかくみなくさらん
のんさとりへ乞みとうて忠まゆするえあうのんを

いやし柳の風よなびくかとしたう花の露を悼く
むしは無ざんいうなる三やせんの人ろ住るまをそ泣
られとのいせんやうりん思ひ是をとつて引
よせ一てかけしろしうつ家の腹のかをやう
を見をとて号ての是れうしさくめてれせ本
孫へひ分さうしの色をかくれまそむりとまを加
うれ下もてさきいてみ御う六ふ殊のまかてし
門の紙よひかひをこう派きんかうしみまかう
くひそちやせうちかやしうれ太刀ここそそう
殊きり死をもかきんまの老八十余人あつひを
御しちの紀式もきのいを天正十一年四月廿日
日坂城をなてこも此柴田一れいとしくるを和

りそとうんこれを見定てあくろあうる浜俗せしふ
みなもと野人山うつまりさこれまてみかりもれい
まむせよのこ初うしまか五日や秀吉哭別うし出
るうつあうむくさの兜を打玉らふ老を迎つ尚
山河のんくのなんえよれ冰まて草くの滝うり
なひくかよし一あん地条すうゆへ小越中乃
さうあ兜うれさし乃城まなひつまうとなりしかろく
たうまて乞ふりそくし國こ乃むさてとうらため
せい為後まとう其とらん越後れ之国こ長尾氏平次
秀吉よりかうとなりもさ下まうくすうてうひと
志らとらさ又月八日あつちまてくまうへちんこ
又勝家ちやくさん柴田権六佐久間玄蕃允すけ八

越前の府中山林をうつしやうのかうより来援
きやうしさん國からく乃城にはなし権六
に引さ山山まをつくこれ称ちうこ玄蕃允今度よ
たてれてうかん人としてとうかふしうかのゆゑ
みくる後まて浴中とわさをりん盛云ある以前
かくあう陣深こあろりいつはまあかんや天下と
ほろかすふよ川く只いさうくのあとしむかし
せい五たうしうんえんいさのふたはる的く車
ふ乃せらく中まわさふせんしやうのこゆふや
なふとしてくつる原わかんやこせいとして
一こ何れ字をよむ　　　　のん蕃のすは
世れ中をめくりそぬれをくろまハ

思ひのいんけ出るうりやう
六条河原にとりいそぎとちうし紫田うむくろ
おき思ふ門ようく所預なり　又織田三敏
信雄人数をけしきれし所にて夷入三七信孝ぬ
軍れ汚うくなんらし苑らいう人はふ急自害し
とりしあそりきすへきやすれいちきうち人は
たいしどまうなし言語ふもは一きめの思い
うをつるね　　ねふたり
たららねのお懐そくをさしあつさゆる
いなそのれ出れ森とむゆくとも
あの山まてるくとあうひかとをきなめ生やうかう
君ね軍とと下されくとくろれ太刀抜りつてみれ

うつくひとそをねてきすなやくん自らてわひほろ
ふるすほせんとてもん発いるあうきや秀吉は孫
るうい今めひ羽やめんのたへるに刈坂りとの城
ま趣をもらくのひとくま記今夜やれうをれも
てよ決ゆくひてうしきりくろを一筋や至八を雪
くもふうなりそめんくそ

福浦帝雲　まれさの甚内　殊夜孫六
同虎ずは　平野なんをい　加とうきり数作
うずは助太郎ろ　桜井左吉
ひくよりしさん三西也
尾州兵ぬを一まんうりそけ入甲をぬうき死を先
ふかりてきやていおしめをつし出うらくせして

右九人をまさしく時の将さと給を全うやうせと
其のほしそへまうちん退るつてうゑてのれ状を
うれ文り云
今度三七后ひほんまよれて滝川大の介は除つ色
きしける丹さき柴田とゆかのすけやなりの世抑をも
てうりとりそしとう王出乃家一きんうりまよ安趣さ
た光秀吉一統をせむふこころんつけわさうさ
致由色まを合さうくつけつあうりまんり
とりそし一ちんや王を合せひれいなさりてらされ
てうわうひ也して致をも天子在三子在あてとこな
い後もんいよくきやうこう軍ますれちう役ね
きんまろうりをひてきな役くんこうおほらふ

へ今光なりのめ件

天正十一年七月一日　秀吉判

軍嵩うりそくしやうこう時ともしをもしこれ
なりしのふして滝川左あん大夫あんそうし一方
をまうせ出もよの城にわさ致乃あひさふようと
なりし時東西うりとりそしをわう家氏政北國うり
とりてや柴尾つけうつ西國まてをきりてれりく
みな秀吉うりおこるうふ国すり天下ことやうのひ
ふきすりんれかりそ天下治ところ三ぶけありせん
せうそのんちんなりかてくともおふねせうアなわ
はらうことをもこふいちやうとやうすわみなりこ
のまさとも旧本とおさむる事三けんありよ

つゐにせんあうをほくしのちはけるにこの
せいにとまちりほうてうとれあさえせいゐをとり
きこゑれみかのやうしんいくさめとなす処なり今或
ひてよし一んにはけるまこととめくりしりてを
たくもへおくう入ぐ後そりまことに前代ここん
の大将なりあの数年らうをなしこうをいむ諸
侍らまぬ降しゆうれらうれせんだいをいさめ
國こをあてとこなるこのまり國このもよたる或
をうまぐ後をきやくしゆるひとうきをそせんし
え軍くんもん諸将やまんしひとんにのやう諸
ぐ後ほりのりうれまくあんのやうしりそうの流
これありるいもやうの臣者ころ加さ三奴信雅こ

伊賀伊勢尾張三ケ国のやけくとし打ちせとたつ
とひ播州長し海船たちやうまり織田上野守信継を
伊のくいにたろあるまり松し海つりし意義すけ
たろまりほしきれ恩田長門守みれく國阻田紀伊
のこ太子八勝九郎うねいすもい与八のうこ金山
舞勝三以列日野をうもうひるれうこせたわさの
孫兵衛坂本を枝原七良左衛門式部多し右兵門
有ハ郎高し海が萩佐久間さし山羽柴左衛門射越
前一國かならん國の忠由こあれさう五良右衛門
射所あのむちやもうきの守みとなんあくうく
そんおくまんへたみ左衛門射志川中とまこいく
武田若すけわのさ佐々とり隼人のすけ多須塚尾

葭そす丹後乃しゆこ長岡越中守宮川の城たん
波を羽柴筑前守秀長山井城すりをまぢましさを羽
柴義淺が見しぬるにやうや東こかりこときしお
田穂太須さんのせうましこかり疾つれそりちを
う小六ひろ瀬れたろそさもんさ念さんすり但馬
竹田くハ山ミの里のさんまさえ木下好兵衛因幡
わミやをせらやう坊と川ふうたろすり 姫路が城
めうな平太史ひろのそりめ井新すなしうその國
なをさなんてうりんひやう衆がもらすれかと子石
猩兵衛りしやまうしべ兵衛尉使せん見ま何の安
あくう氣たが城りへせん年けまきのおさよし
ほんの武さぞミミい事くとそむさひてよし一見の

為そりわやう氣すり我くまなふとりをせ無二の
うく王たしさ田川ちん弘なすされまより之亜哉
そんかうれ給ちや仁男子出しせいくんと名字と
皇けり羽柴八幡とのうぞ子國のかなくもう化し
給ふ哉なり四國をとつく八十河やまさた木秀吉の
そこ下やをされ國らやうをの色ちんかりやです
世りへさそうようれさす枝國とようたうちう乃
給おわすところうさされ由緒と定め秀吉尭河内
れ國まとりし城くハを頭完光りの地又氣内中し
ひろうしてまをや海とりしそ摂津南ハ山さろ四
方くくう大まして中まいうくさよりくふ大河
まハりしと川のすゑやまと川なり合其外則ち

ゐ入大船小舟ちやくうんする事いく万そう
と云事をしらず平安じやうへ十余里南にあたり
ちかくして天王寺住吉さかいの津三里余町にへん
や摂辻小路をたてつゞく大坂の山下にすまゐやしき
内にはいそうやうまへらし[illegible]られ城主となつて
けいこくする物なりける所なりやうとぼく井
と申和泉中村豊平次世州兄より豊七
居いつも中河藤兵衛射山城守柳本奴路
中路殊乃御国代として玄仁清安を[illegible]むる
年よりぞ豊道ありて繁つふしてとさきよくをなし
秀吉是をもちかよりぞ大事務をさうさむれ物也又
まつなれ初のそれたんきすをひを[illegible]るとてさんそ

秀吉公をきうめいし只今大坂は繁昌とする
処の君天下の法度を高さらくとひろうし日本
八方くまなくおさめらるゝのこしらへちやうをうけ
するを以て繁昌をこふむりしへこれはるを
三十余りの国は人数国々をんきやうくせとおちう
志ふれ論よりぞ大石小石須あつ[illegible]業を軍兵乃てつ
ふりうる城行職は古今きせ川乃大こう也諸人
なにをせむしろうその法あくしろりらた石小石
かしこ人見大坂ろ作めたいち頭うさへれ[illegible]を
作く諸門あきれらふ示るすき達い志やうさんと
作くすこれまけりんをありひためとねたむ業
んれとくたいしきしめ秀吉一人の天下とし

てうわこともしまうりれ萬民そうししなりて〳〵ゆたかなり
ちけいつくさすところ諸國家乃太平安の時なりけり
就　今上皇帝ゐいりんなのめならすこれより
まれてふゐいなく翁日きけけせいくふの始をよ
きやう舜三くそん礼にをよくをほとふらくかし
らい王う之人民のけう感なかひうすとりふす
なしちやうゆれ久〳〵のらく仰ふりにしまのしゆ
かうすりよしく世いゐ沢かなまをいてたみと
かくすら老子状去久代らんしやうまかりすやい
忍法第くし　　　　　天正記第二終

于時天正十一年十一月吉日

110X
323
9